



# 第11回 四万十川桜マラソン大会

第11回四万十川桜マラソン大会を3月31日に開催しました。  
 今大会は県内外から1,358名が参加し、1,243名のランナーが完走し、無事大会を終えることができました。  
 この日はスタートからゴールまで向かい風となりランナーを苦しめていましたが、ランナーには四万十川の雄大な流れや自然風景を真近で感じてもらったり、仁井田米のおにぎり、心のこもった沿道の応援などランナーに歓迎の心でおもてなしする事ができました。

また、前夜祭では四万十町の食材をふんだんに使った料理でランナーに大変好評でした。



## 【結果報告】

### ■男子総合順位

| 順位 | 氏名    | 県名等 | タイム       |
|----|-------|-----|-----------|
| 1  | 浜田 浩佑 | 大阪府 | 2時間36分26秒 |
| 2  | 東 勇樹  | 高知県 | 2時間37分22秒 |
| 3  | 野中 健史 | 愛媛県 | 2時間39分39秒 |

### ■女子総合順位

| 順位 | 氏名    | 県名等 | タイム       |
|----|-------|-----|-----------|
| 1  | 吉村 友香 | 島根県 | 3時間 4分44秒 |
| 2  | 福原千帆海 | 高知県 | 3時間 6分 7秒 |
| 3  | 佐竹 一美 | 高知県 | 3時間15分50秒 |

## 実行委員長お礼

今年は晴天で桜満開の中での大会となりましたがボランティアの皆さまや沿道で声援を送っていただいた地域の皆さま、御協力ありがとうございました。おかげさまで、無事 42.195 kmの「走ル旅」を終えることができました。

この大会は、雄大な四万十川と沈下橋、桜並木、新緑が相まって全国に誇るロケーションの大会です。今後とも大会の発展のため、御支援・御協力をお願いします。



実行委員長  
谷口 和史

■民泊者数…19人 ■前夜祭来場者数…156名 ■ランニングクリニック受講者数…27名

## 季節の風景 5月

がんねん  
元年



天皇即位の最初の年や、年号の改まった最初の年を言います。また、ある物事の出発点となるような年にも使われます。例えば、「環境保全元年」や「ボランティア元年」などです。本来は、元年が正しい言い方ですが、コンピュータのプログラム上で一年と表示してしまう場合も実際にはありません。

江戸時代の終わり、慶應から明治に改元されたのは、西暦1968年10月23日（慶應四年9月8日）。通常は、改元の詔書が出されたときからその年いっばいまでは、新しい元号となりますが、明治の改元のときには、特例でその年の元日に遡って明治とすることになったのです。「改慶應四年為明治元年」（慶應四年を改めて、明治元年とす）このため、慶應四年1月1日から9月8日までのあいだは、あとから明治元年に改められたわけです。もちろん9月8日以降が明治2年になったわけではなく、その年いっばい明治元年。つまり「慶應四年」は、いったん存在した後、無くなったのです。

また、64年もの長きに渡った昭和の時代は、大正15年12月25日に大正天皇が崩御し、その日に昭和と改元されたので、昭和元年は12月25日から31日までの、わずか一週間だけです。ちなみに、昭和天皇は昭和64年1月7日に崩御し、翌日の1月8日に平成と改元されましたので、昭和64年は1月1日から7日までの一週間で、くしくも昭和元年と同じだけの日数となったのです。

## 今月の



そもそも人と接することが好き！



しまおか ふみ  
嶋岡 文さん  
(藤の川)



▲敷地さんとともに「くぼかわ まち歩き」のモデル出演！

先々月登場いただいた敷地 鮎美さんとともに、NPO法人「LIFE」の職員としての半平カフェを切り盛りしている嶋岡さん。嶋岡さんの人当たりの心地よさは抜群かつ絶妙と、嶋岡さんを知る人が声を揃えます。確かに「どこで身につけられたのだろうか？」と思うくらい！

嶋岡さんは、地元・窪川で生まれ、七里小学校、窪川中学、窪川高校と進み、土佐女子短大の英語科へ。「英語はずっと大好きで、留学したい」と思っていたくらいでした。と

と、思っていたくらいでした。という嶋岡さん。しかしその時代は就職難。卒業旅行でロンドンやパリには行ったそうですが、短大卒業とともに高知市内にある食品卸会社に就職しました。ところが就職したものの「これといってまずいことはしていないのに、なんだか謝つてばかり」という悶々とした毎日。そんな頃、大手旅行会社が添乗員を募集していることを知り応募。そして採用。

「日本中行きましたよ」まだ20代前半だった嶋岡さんは、未熟であることを隠さず、とにかく一生懸命。自分の親くらいの年齢のお客さんからとても可愛がってもらえたといいます。添乗員という、お客さんに振り回されたり、叱られたりが付き物のようですが、嶋岡さん曰く、そういうことはほとんどなかったというのです。お話を伺っていると「そもそも人と接することが好きな人」ということがよくわかります。聞くと、その自覚は高校生の頃からあったそうです。アルバイト先でレジを担当していたのですが、店長から販売の方へ回るように指示され、販売業務についてたところ、これが思いのほか楽しくて「私、向いてる！断然、事務より接客！」と気付いたのだとか。

嶋岡さんの人当たりの心地よさは、もともと持っている資質プラス、食品卸会社での日々プラス、旅行会社での接客経験によって完成されたものなのですね。